薬史学会通信

NO. 21　1995年2月

〒113
東京都文京区弥生2-4-16
㈶ 学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局
Phone（03）3817-5825
FAX　（03）3817-5830

日本薬史学会 '95（平成７）年度総会 講演会のお知らせ

と　き　　1995年（平成７）年４月15日（土）午後

ところ　　東京大学薬学部記念講堂（文京区本郷）

12：00～　評議員会

13：00～　総　　会

~~14：00~~ 13：30～　総会講演

渡辺　徹（日本薬剤師会）：薬務行政の変遷

吉岡　信（東　邦　大　薬）：江戸期の売薬から今日の大衆薬まで

ーセルフメディケーションの変遷ー

16：00～　懇親会：東大医学部図書館地階食堂（会費・3,000円）

（来聴歓迎）

第32回国際薬史学会議（続報）

1995年９月25日～29日、パリ

２月に入って学会事務局のF. Chast氏より連絡があり、講演申込の〆切が1995年４月30日に変更されたこと、学会参加費が550FF（４月30日までに前納の場合）となったことなどが判明しました。（送金先等については日本薬史学会事務局へ）

第55回世界薬業・薬学会議（ＦＩＰ）

1995年９月27日～10月１日、ストックホルム（スエーデン）

薬史学の部会は９月31日（木）、公用語は英語ですが、日本語に対しては希望により有料で通訳可能です。

講演要旨〆切は４月１日、事前参加申込〆切は５月１日。（詳細は日本薬剤師会へ）

第３回ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅　報告記

本学会主催によるヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅も順調に経過し、第３回を数えるに至り、総員13名、添乗員として深沢敦氏と共に、予定通り６月19日（日）成田を出発しました。

日程の概略は、20日～22日までスェーデンのストックホルム泊、同国薬史学会の好意により関係医薬史蹟、王立アカデミー関係の施設、また中一日をかけてウプサラ大学まで足を伸ばして学術・宗教の中心史蹟を見学しました。23日～25日まではフィンランド・ヘルシンキにあって、夏至祭休日の街の様子や深夜のフェスティバルを体験。25日午后にデンマーク・コペンハーゲンに移り、27日まで医薬史蹟などを参観。北欧３国の「民度」の高いお国ぶりを味わって28日（火）に帰って参りました。以下に参加者の印象記を掲載します。

北欧随伴記

中西　淳朗

93年12月だったか、日本医史学会と日本薬史学会が合同で月例研究会を開いた所、薬史学会の方から、来年は北欧に行きますよ、というご案内をいただいた。薬学史の方々が92年からヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅をされていることは承知していた。部外者は参加出来ないと思っていて問合せをしなかったのだが、学会の席上でのご案内を聞いて喜んで参加することに決めた。

実は薬史学会の事務局の一端を担っておられる高橋文さんと私は、共に洋学史研究会（青山学院大学の）のメンバーであり、高橋さんが今回の旅の企画者であるらしいということもあり、安心して申込みをした訳である。

過去15年の間に20回以上、内外の旅を企画し案内をし世話をした経験を忘れて、全くの部外者として連れていってもらうことにした。どうせ下手な英語は通じないから、出来るだけ日本語で押し通すことにして、多くの参加者にご迷惑をおかけしたと思っています。誌上をかりてお詫び申し上げます。

さて、今回の北欧行で小生が得られたものを大略３項目にまとめることが出来ました。

１．医科学の歴史的研究

これに関しては多くの皆様が内容豊かなレポートをお書きになるでしょう。小生はストックホルムのスェーデン薬剤師会館、ウプサラ大学（図書館と好古館）、コペンハーゲンの医学史博物館が非常に勉強になり、学会報告のテーマを見出したぐらい成果がありました。高橋さんに本当に感謝しています。

２．北欧の医薬事情視察

各国の政治情況を反映して、夫々の国が医療スタイルを異にしているが、特に注意したのは、スウェーデンの薬剤師の地域医療に対する参加姿勢が幅広いこと、デンマークで、日本の保険医療の行きつく姿をかい間みたこと（安い薬以外は保険からはずす）、そして日本でいう医家向け医薬品の広告（ＯＴＣ制によりゾビラックスの店頭大広告までみた）まであることなどなどであった。

３．文化人類学的お遊び

たぶん、この項に当ることは、みな様がレポートから除いて書かれると思い、あえて書いておいたのです。

ａ．ストックホルムのスカンセン自然博物館で、日本でいう校倉作り、高倉作りの建物をみたこと、そして登呂でみる様なクリヌキ式木製階段をみたことなど、実物をみてあらためて驚きました。この校倉作りの家の建材は輸出されていて、軽井沢にたてた男がいます。

ｂ．ストックホルム市には、市長はいない、これにはびっくりでした。自治体は議長、

収入役、総務長の三方の切りまわしで運営されている。従って市民みな政治好きとなる。

c．夏至祭、これは仲夏火祭とでもいうのでしょうか。ヘルシンキ郊外のハデな祭を見物したのですが、自然公園の島が会場なんてシャレているし、その日結婚したカップル代表がその夜の主人公なんて、臨床学会の化石的存在の小生には考えも及びません。夜店でのんだホレ薬（ハーブ湯）は効なく、盆踊り大会、ドンド焼きに当る収穫予祝祭のようなお祭りは、楽しくまた愉快でありました。

ただ残念なことに、12時すぎからはじまる歌垣をのぞき見できませんでした。ホレ薬が効いていたらどうなったでしょうか。

d．ヘルシンキでは夏至祭のため、どこも休み。博物館ものぞけないし、デパートも休みで、まあ盆休みなのでしょう。時間つぶしに市内電車にのることになりました。

山ノ手線、港町線からなり8字を作り、内廻り、外廻りがあり一周一時間、運賃180円。のってみると実に面白い。社内の吊下り広告に曰く。ヒルドイド・フォルテ、モビラート軟膏、これは共にドイツのルイボルド・ウェルタ社の製品とか。ＥＣで輸入せざるを得ないのかなと思う。

e．コペンハーゲンのチボリ遊園地では、屋外パントマイム劇場で、生の音楽で笑劇を上演していた。樂士は8人ほどで指揮者がつく。子供向きだからと云って手を抜かないのには感心した。事業家の社会的責任のあらわれか。本当に子供を大切にすることは、こうやるのだと教えられた様な気がする。

f．コペンハーゲンのオスタ通りは、まるで新宿である。買い求めたＴシャツの姿で、アイスクリームをなめながら歩く。誰もふりむく人もいない。まさに、対等、平等、自由である。そう云えば、女王様のお住いにもカコヒはなく、むき出しのビルでありました。

最後にみな様の御親切に感謝いたします。ありがとうございました。

スエーデン薬剤師協会を訪問して

内藤記念くすり博物館　岩井鉱治郎

旧図書館閲覧室をそのまま生かしたように見える講堂に案内されました。壁面は二階建ての回廊になっていて、作り付けの書棚が二階の天井まであり、古い図書が配架されている。正面の演壇は１ｍほど高く、議長や司会者は座っていても全体の動向がよく解るようになっている。天井には、ビデオ投影装置が設置されている。床には、朱色の肘掛けの付いた堅い椅子が150ほど整然と並べられている。その椅子に座って薬剤師協会の活動などの説明を受けました。

その印象は「薬剤師協会が中心になって、薬局も薬剤師も社会の要請に応じて変化しながら、国民生活の中に根をおろして、活動しようとしている」と言うことでした。なぜその様に感じたのか？考えてみますとスエーデン薬剤師会でヘルデリュースさん中心に薬剤師会の活動を説明していただいた中に次のような指摘があったことと非公開ながら保存している古い薬局のマークや資料、古い貴重な図書を見せていただいたからです。

1)　「地域毎に薬局の適正配置を考え、薬局の統合や再配置を行っている」

2)　「スエーデンの人口は850万人であるが、年間のべ7500万人が薬局を訪れる。850万の中には、赤ちゃんや子供も含まれているので、自分の意思で行く人は、月に一回は、薬局を利用している」

3)　「一薬局当りの人口はフランス、ドイツでは、2000～3000人であるのに比べてスエーデンでは１万人で、それだけ効率的に仕事をしている」。

スエーデンの薬剤師会では、薬局が「一般

市民の健康を守る第一線窓口としての機能を果たすのだ」という考えで行動しているともいっておられました。とは言っても、1万人に1薬局が適正配置であるかどうか？国民生活の在り方によるので一概にはいえません。また、薬剤師会を恐らくはリードしている方の説明ですから、薬局の統合とか再配置とかについて、一般の薬剤師さん達が納得しているのかどうか？もよく解りません。ただ、考え方はよく理解できました。そして、薬局に関わる過去の資料が豊富に保存されていることには、私も驚きもし、感激もしました。日本ではこのような例をほとんど見ないからです。

また、別のところでは、薬剤師の任務は？との問いに、次のような答えがかえってきました。

1) 薬局の連携による医薬品の24時間供給体制の確保
2) 医薬品使用法のやさしい説明

ここでの薬剤師達がこのように社会における立場を明確に意識していることは、何によるのか？疑問に思ったのです。そして、スエーデン薬剤師会における説明を思い出しました。即ち、薬剤師会の活動は大きく分けて四つあると説明された事です。

そのなかには、1) 国際化対応と行政にたいする意見具申、2) 薬科学会の統括推進、3) 薬剤師会誌の発行、4) 薬剤師の卒後教育があるとのことでした。そして、薬科学会には10の分科会があり、そのトップにHistory of Pharmacyがあげられていました。そこで歴史を踏まえた社会のなかの薬剤師の立場を教育しているのであろうと推察したわけです。

現実の薬局の在り方が大きく変わっていくからこそ、過去の薬局のマークや製剤道具も保存していく必要があると考えているように感じました。薬剤師としての自負を養成していくためには、薬局が社会において果たしてきた役割を歴史的資料によって確認することが大切であると認識しているのでありましょう。

北欧医薬史蹟を訪ねる旅印象記

高橋　文

スウェーデンでは、前を通り過ぎながら中を見る機会がなかった王立科学アカデミー、ウプサラ大学本部、スカンセンにある1700年代の古い薬局などを見ることができて、満足しています。ベルセリウス博物館はDr. Margareta Modigの提案でしたが、化学に活力を吹き込んだベルセリウスについての認識をあらたにした次第です。日本ではその存在すら未紹介のいくつかの博物館や史蹟などを見学することができたのも、薬史学グループとして訪問できたお陰です。

スウェーデンで私に最も印象的であったことは、少なくとも薬に関する史蹟にはスウェーデン薬史学会が深くかかわり、責任を持っているということでした。前ス薬史学会長のStig Ekström氏は五つの薬史学博物館を作ったと聞きました。薬剤師会付属の博物館、スカンセンの薬局、Köpingのシェーレ博物館、Göteborgの博物館他ということです。我々のスウェーデン滞在が三日間なら、Köpingへ行くよりはストックホルムで二日間費やしたほうが有効との判断をされたのもEkström氏だそうです。我々の訪問に、スウェーデン薬史学会のみなさんが全面的に協力して下さったことは嬉しいことでした。

今回の旅には医師二名のご参加を頂きましたが、ス医史学博物館が改築中で見学できなかったのは残念でした。またDr. M. Modigはフィンランドやデンマーク薬史学会の方とも熱心に連絡をとって下さったのですが、時期的にうまくいきませんでした。我々が見学したデンマークの薬局は深沢氏のご努力によるものであり、これらの見学は我々に多くの示唆を与えてくれました。またスウェーデンで、

デューク・エイコさんに通訳の労をとって頂けたのは僥倖でした。フィンランド、デンマークでの通訳の方にも大変にお世話になりました。

シェーレとベルシェーリウス

山川　浩司

北欧への薬史の旅は、私にとっては化学の開拓者、スウェーデン人のシェーレとベルシェーリウス（日本ではベルツェリウスとよばれてきたが、この呼び方が正しい、化学と工業47(6)、782-3（1994）参照）の足跡をたどることにあった。しかし今回の旅は予想を超える収穫の多かった満足した旅であった。シェーレとベルシェーリウスがスウェーデンの誇る化学者であることは、6月20日のスウェーデン薬学会博物館の展示、21日のStorken薬局の胸像、王立アカデミーの肖像画などからも分かる。

C.W.Scheele（1742-1786）はストックホルム郊外の薬局で働いていた薬剤師であった。この薬局は6月20日に訪れた市内のスカンセン野外博物館（明治村の元祖）に移されていて、薬史学会副会長のエリクソン氏の案内で、普通では見られない部屋で器具や薬品箱などを見せてもらった。酸素の発見（イギリス人のプリストリーより早く、後のフランス人のラボアジェーによる近代化学の確立へつながった）のガラス器具の実物を見ることができた。

21日に訪ねた王立アカデミーの近くにベルシェーリウス博物館があることを初めて知った。この博物館に元素分析装置があった。J.J.Belzelius（1779-1848）の元素分析値のほうがドイツのリービッヒより正確であったと言われている。多くのガラスや実験器具類やそれらを工作する道具類が展示されていた。また合成された多くの有機化合物がガラスのサンプルチューブに、私の想像以上（約10gぐらい）の量が保存されていた。私たちもかっては元素分析サンプルをサンプルケースに保存していたものだが、今ではIR、NMR、MSスペクトルメトリーなどの出現により、物質同定主義からスペクトル同定主義へと移り、このような習慣が無くなってしまった事は反省させられる。化学は物質科学であることを改めて肝に銘じなければならない。

私はベルシェーリウスこそ有機化学の開拓者であり、ドイツのリービッヒは有機化学の組織者であったと思っている。一昨年訪問したドイツのハイデルベルグ、ギーゼン、ミュンヘンのいずれでもリービッヒの有機化学の人脈図を誇示していたことからも分かる。

それにしても、錬金術によりアラビアからヨーロッパへガラス器具の使用が広がり、気体の化学から定量的な近代化学の確立につながったのに対し、錬金術が入ってこなかった東洋や日本ではガラス器具の使用が遅れ、化学薬品の導入が遅れたために、薬剤師の機能技術と医薬分業の確立が遅れたことを立証する旅はまだまだ続きそうである。

印象記

大橋　清信

旅行第一日訪ねたストックホルム薬剤師会では、講堂の壁面を隙なく埋める蔵書に目をみはり、付属の博物館の展示にこの国の薬剤師が積み重ねてきた歴史の重みと、今日現在その職能を誇りとしている姿勢が十分にうかがえた。また旅行中諸所で展示されている往時使用したフェイヤンス焼の薬壺に焼付けられた薬名をみて、早くから薬品の規格化が進んでいた一面を示すものとして、ひとしお深い感激を覚えたことである。

K・Yさんへ

藍沢早智子

北欧を訪れました。北欧の街は丁度夏至のころで、しかもサマータイム。夜10時を過ぎても空は真っ青。太陽が沈んだ方向の空は夕

焼色に染まっていました。ですから、予定の行事が終わった後地図を頼りに1人キョロキョロ歩くには時間がたっぷりあって絶好の季節でした。

Stockholm で Globen を訪れたことを報告しましょう。市街地で歴史を感じさせる重厚な建物や協会等を沢山見た後では新しい物が見たくなりました。ホテル近くの Slussen 駅から地下鉄で Globen のアリーナを見に行きました。窓口でチケットを買い電車のナンバーを確認し、エスカレータでホームに降り立つと電車のドアーが閉まるところでした。後ろから上品な老婦人が“Globen でしょう？　この電車よ”と教えてくれました。“Thank you”を連発して飛び乗り、分岐点の駅をいつくか過ぎたころ電車は Globen とは違う方向に進んでいることに気づきました。車中に大きく№18と書いたボードが吊るしてありました。確か窓口では№19の電車と教えてくれた筈です。分岐点まで戻り今度は無事Globenに着きました。駅の正面に真っ白な半球状のドームがぬっとそびえていました。1989年にオープンした新しいStockholmのシンボルで、1923年の市庁舎落成以来の出来事として反響を呼んだそうです。因に、高さ85m、直径110m、収容人員16,000人で、各種スポーツ、コンサート、会議等多目的に使用されているとのこと。残念ながら中には入れませんでした。それにつけても、市街地の重厚なアパート群とは違った郊外の住宅地ののびやかな車窓風景をはからずも見せてくださったあの老婦人に感謝です。

印象記

山田　昇・恵美子

ストックホルムの最初の朝、薬史学会会長よりスウェーデンの薬学、薬剤関係の諸事情に就いての話を聞き、末端のapothekeに至るまで公的に管理されているのに驚く。2日間にわたり市最古の apotheke やらスカンセン野外博物館内のapothekeの古い保存品等、案内して下さったHARDELIUSさん、事務長さんに深く感謝します。

次に王立科学アカデミー、回りの壁面に歴代のノーベル賞受賞者の肖像の数々、大きな円卓のある重々しさを感ずる会議室、授賞採決が行われる所とか、思わず厳粛な気持ちになる。

伝統あるクラシック建造物、ウプサラ大学、歴代の学問に貢献した学者等を讃え、リンネ・ツュンベリーが整然と校内の森林の中で、手厚く埋葬安置されている、さすがノーベル賞の国スウェーデンである。

リンネ教授隠退の生活　見渡す限りの大草原の中、草花の生き垣に囲まれた邸宅、スケールが大きく自動車のない時代だったろうに、生活の程、想像し難いものがある。

ヘルシンキの夏至祭、コペンハーゲンのアンデルセンの生家、未だ脳裏に残っている。又行ってみたい素晴らしい北欧の旅であった。

第3回ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅へ参加して

千野　多代

ようやく第三回に参加できました。北欧へは1987年に高齢者の医療・社会福祉の課題で訪問したので、少し懐かしい思いがしました。

今回は、スエーデン薬史学会、薬剤師会の方々にお会いでき多くの事を学ばせていただきました。

一番印象的だったのは、スエーデン薬剤師会が国民への医薬品供給に責任を持ち、諸事業を進めている事でした。

従って、スタッフの教育、医薬品の経済性（使用薬剤の製造、銘柄の検討等）、供給体制の整備（町の薬局の統合・整理等）等を実施し、一方で国民が何処に住んでも必要な薬は手に入れられるように、不採算薬局の維持や、薬品中継所システムを作り、必要とあらば薬の配送までやっています。責任を持ったサー

ビスですね。

次にスエーデンやデンマークの薬局ではアメリカと同様に調剤をしなくなっていました。殆ど小瓶で渡されています。その理由は、精製度、ＰＬ法、等等ありますが、その必要度が減少し「現在は情報を与えることが大事な仕事になった」とのことです。

日本と違って、医薬品販売類の13％が病院への納品で、66％が処方箋薬として薬局に、後の薬20％がＯＴＣ薬や生活関連雑貨で、やはり薬局で扱っているようです。又、得た知識は、政治家へ意見として出し反映させていくとのこと。羨ましいですね。現代に至る迄の薬学者や薬剤師の歴史を学び、その成果を見学する事が出来ました。

小雨降る白夜のストックホルムの街は美しく印象的でした。フィンランドの夏至祭、コペンハーゲンの舟めぐり、ルイジアナ美術館、それぞれの国の文化と美しさ、それを守っている国々の人々の心意気が伝わってくる旅でした。

参加されお世話になった皆様、計画して頂いた方々に厚く感謝いたします。ありがとうございました。

所感

小倉　豊

今回のツアーで一番感激したのは、リンネの植物園と晩年をすごしたというウプサラ郊外の家を訪れたことであった。リンネの偉大な名前は知っていてもその実像をあまり知らなかったので、リンネ博物館の展示品からはいろいろなことをおしえられた。

「医師であったこと」「植物のみならず、動物・鉱物の分類をこころみていること」「二名法の創始者であること」「日本にきたツュンベリーをはじめ世界中に弟子を送り、植物を採集させたこと」

これらの事実は、18世紀の博物学の興隆という背景があったが、何故、極寒の北欧に植物学の権威が生まれ、世界中の植物が集められたのか、私が感じた素朴な疑問であった。どうも「神によって造られた自然の秩序をさがし出す」という宗教感が当時の博物学であり、リンネをささえていたものであったようであるが、詳しくは、今後勉強してみたいと思っている。

コペンで見たもの

渡辺　楷

コペンハーゲンは北欧とヨーロッパを結ぶ玄関口に当り、人々は明るく、開放的で、ユーモアに富んでいるといわれている。われわれ一行が泊ったホテルは、市庁舎前の古い、レンガ造りの伝統あるシックなパレスホテルである。しかし、その屋根上には広告のネオンサインがあって、一寸幻滅である。近くには、チボリ公園があり、ディズニーランドの原型といわれているように、楽しい遊園地であった。市内は黄色い市内バス（ＨＴ）が縦横に運行されている。そのバスの側面には様々な広告があった。中でも、衝撃的だったのは、側面一杯に画がれたヌードの男女が抱擁しているものである。詳しく見ていると、この手の広告のタイプが４つあり、５～６台に１台位いの割合で目にする。市民は無関心である。コペンハーゲンでは、フリーセックスがとかく云々されている。現に、空港のトイレでは、コンドームの自動販売機があり、また、中央駅の裏手には、飾り窓の女性がいる街もあった。エイズもかなり蔓延しているとか。あの広告の内容は何か、同行の何人かで話題になったが、如何せんデンマーク語は判らないので、広告の絵を見て、勝手に推測し合った。最後にわれわれ一行のガイドしてくれた女性に、その内容を聞いて、市民が無関心でいる様子のわけがわかり、拍子抜けした。その広告のコピーは

UIMOÐSTÅELIGT BADETØJ

絶対欲しくなる水着

CENSUR

脱いではだめよ！

White on Black／デンマーク国立博物館

川瀬　清

案内・通訳の方々の説明の端々に、知性と民主主義の国を感じた旅でしたが、最後の訪問都市コペンハーゲンの国立博物館の特別展示で、それを裏付けたいと思います。

その展示の表題は“White on Black”で、“西欧民衆文化における黒のイメージ”と言う副題がついていました。正直のところ驚きの連続でした。プログラムの説明では「この展示は、ヨーロッパおよび合衆国で前世紀以来、アフリカ人・アフリカ系アメリカ人に対する偏見を表す映像および実物のコレクションで構成されている。この展示は、Felix de Rooy と Norman de Palm によって集められた Negrophilia Collection を基礎にしており、アムステルダムの Negrophilia 基金によっている。

奴隷制および植民地主義は、とうの昔に廃止され、市民権運動は人種的偏見に対する戦いに多くの勝利を収めてきた。にもかかわらず、今なお、ナイーブではあるが、異国的な黒人の姿が、自然のままの、人のよい、或は身分の低い子供として描かれ、また－現代社会になるにつれて－専ら娯楽産業に属する人だったり、スポーツマンとして描かれた人によって囲まれていることかを、この展示は証言している。」と書かれていました。ヨーロッパ人にとっては恐らく無意識領域に食い込む辛い気持ちでこれらの展示を見られる事だと思いました。ひるがえって日本で今、アイヌ民族文化破壊、朝鮮文化圧迫などをテーマにした展示会を開くことができるだろうかを考えた時、世界に先駆けた文化を創造している北欧の姿が改めて見えて参りました。

想い出

栗原　要子

思いがけず北欧の旅に誘われうきうきと楽しさ一杯で沢山の想い出に浸っております。大変お世話になりまして感謝いたしています。有難うございました。下手な旅の俳句を書かせていただきます。

雲上の虹　外国（とつくに）のかけ橋か
白夜の空青しと　そぞろ歩きけり
大いなる　月にどよめく夏至祭
聖歌澄む　白夜のウプサラ大聖堂
リンネ山荘　辞する白夜の草の径
青芝や　尖塔美しき庁舎かな
薔薇の香の　よぎる市庁舎舞踏の間
リンネの像　菩提樹並木緑映ゆ
夏至祭に　心満たして便り書く
夏雲や　ドゴール空港人あふる

会員消息

○　吉岡　信　評議員「江戸の生薬屋（青蛙房）」を刊行さる。

東京・千住で漢方専門薬局を営む一方、東邦大学に教鞭をとり、大著「近世日本薬業史研究」によって薬学博士の学位を受けられた吉岡信会員は、この程、江戸時代の戯作者や文人たちが従事した薬業の姿をまとめて出版された。同書は朝日新聞の書評欄にもとりあげられ好評を博した。来る95年４月15日の本学会総会には、同氏の講演が予定されている。

○　播磨章一　評議員、近畿大学より薬学博士の学位が授与された。

テーマは「薬学・大黄の薬史学的考証と品質評価に関する研究」で、播磨章一会員が日本薬学会年会・薬史学部会で発表して来られた漢薬・大黄の輸出入の経緯、価格の変遷など薬史学的研究が主柱となり、これに実験薬理学的手法によった品質検定の結果が加わった労作である。

日本薬史学会事務局より

昨1994年秋に、本学会創立40周年を記念して講演会を開催し、日本医薬品産業史を薬史学雑誌題29巻第２号として特別出版するなど成功裡に企画を進めることができました。ここには、本学会その後の計画などにつきお知らせいたします。

○薬史学雑誌第29巻第２号「日本医薬品産業史」の品切れについて：薬史学会通信№20に既報告のように、会員あて発送後の約百部につき実費で特別領布したところ、注文が殺到し、遂に在庫が無くなってしまいました。

なお、本誌の内容のうち、第１部『日本医薬品産業の特質』第２部『近代史』第３部『現代史』については、その一部を加筆・修正し、さらに年表を追加して「日本医薬品産業史」として薬事日報社より年内に出版の予定であります。

また、第４部『医薬品開発の記録』についても発刊の強い要望がありますので、増補・改訂の上で出版の予定で、新たな企画に入っておりますことを付け加えます。

○次年度以降の本学会主要目標――戦後薬学50年――明日の薬学を求めて――について：さきに1982年、本学会員も製作に協力した日本薬学会百年史には、その後章に『薬学の分野別研究動向』の項目が設けられ、各分野での近年の変容が述べられています。本年は戦後50年という節目の年で、新聞、雑誌などで多くの特集が組まれ、公刊されています。そこで、本学会としては、21世紀に移行する前に20世紀を総括して次世代にバトンを渡す企画を建てた次第です。戦後50年という切り口で見ますと、この間の科学・技術の進展により、薬学の世界に新しい研究領域が芽を吹き、みるみる急成長を遂げた部門があります。例えば情報科学技術、生体微量分析、生化学、薬理学・薬剤学・医薬化学・医療薬学・社会薬学など。一方、天然物化学・有機化学・衛生化学など従来の日本薬学研究を支えた伝統的基礎科学も、面目・内容とも一新しております。しかも戦争前後から第一線に携り、その後の経過とともに生きて来られた諸先輩が、そろそろ定年を迎えられている年代でもあり、今が好機と考えたわけであります。

次年度早々より開始いたしますので、会員の方々のご協力をお願いいたします。

○日本薬史学会ロゴ・マークの制定について：本学会創立40周年記念号冒頭の、世界各国からの祝詞を見ても判るように、種々の個性的なロゴ・マークが使われています。日本薬史学会でも、親しみ易く、国際的な感覚からも受け入れられるデザインを求めることにしましたので、一緒に考えて下さい。最終的デザイン、基本的なコンセプト、ラフスケッチなど何でも結構です。

当方といたしましては「日本薬史学会」の文字またはJpn. Soc. History Pharm。あるいはJSHPを入れたいと考えております。（ご意見は本学会事務局まで）

フランス薬史学会

イギリス薬史学会

スウェーデン薬史学会

国際薬史学会

日本薬学会第115年会（仙台）薬史学部会の内容

と　き　　1995年３月30日（木）

ところ　　東北大学教育研究センター・A-106教室（旧教養部）

一　般　講　演

9：36～10：00

・仙台藩の医師「高屋家」に伝えられた薬箱について
宮城県大崎保健所　○那須　務、東北薬大　吉崎　文彦、大阪薬大　草野　源次郎、明治薬大　奥山　徹

・東北地方における救荒植物文書「民間備荒録」、「飯粮集」、「かてもの」について
大阪薬大　○草野　源次郎

11：00～11：00

・『耳嚢』所載の民間療法に用いられた薬物
熊本工大　○浜田　善利

・江戸中期の採薬記からみた木曽の薬草について
岐阜薬大薬草園　○後藤　尚夫、日野製薬　山口　茂治、岐阜薬大　田中　俊弘

・明治時代の薬学教育　東北地方の部
熊大・岡大名誉教授　○小山　鷹二

・第二次大戦後の日米薬学の比較(4)－医学・歯学・薬学・衛生看護学と医療－
日本薬史学会　○金庭　延慶

・近代日本医薬品産業の発展（その10）昭和初期における医薬品産業の情況と製薬企業(4)
代用薬と代用原料
日本薬史学会　○山田　久雄、山田　光男

11：00～11：24

・薬事法を引用した裁判の判例について
日本薬史学会　○末松　正雄

・医薬品としてのジエチルスチルベステロールおよび関連化合物の史的考察
日本薬史学会　○末広　雅也

「薬史学・薬学概論に関するシンポジウム」

13：00～16：00　　（座長）山川　浩司

「日本薬史学会施行アンケートから見た全国的傾向」　　日本薬史学会　川瀬　清

「薬学史授業の経験から」　　共立薬大　辰野　高司

「『薬学概論』授業の経験から」　　北海道薬大　吉沢　逸雄

「薬学概論授業の経験から(2)」　　慶大・薬研　柴田　徹一

「総合討論」

薬史学会々費を前納下さい

一般：（年）5,,000 円、　学生：（年）2,000円

振替口座、00120-3-67473、　日本薬史学会